

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 アンデルセン『人魚姫』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 20 回のツイキャス読書会の課題図書は、アンデルセンの『人魚姫』です。

朗読はこちら <https://youtu.be/bb8uZ82rGbc>

青空文庫版テキスト http://www.aozora.gr.jp/cards/000019/files/42383_21527.html

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「人魚姫」 — 人魚のひいさま ハンス・クリスチャン・アンデルセン

海の世界に
神さまはいない。

いえ、本当はいるんです。
アンデルセンは、敬虔なキリスト教信者でした。
そして余談ですが、好きになった女性に何人も振られ、生涯独身だったそうです

「人魚姫」は1837年の出版で
アンデルセンが32歳のデビュー間もない頃の作品。
ちょうど好きになった女性に振られたタイミングだったらしい

だからと思いたくないけど
15歳の初恋は
あまりに切ない。

神さまがいたら
毎日お祈りして
そしてそのうちこの恋は叶わないって気づいて、
もしかしたら諦めて、
次の恋が見つかったかもしれない。
でも
神さまは登場しない

登場するのは
不当な取り引きを条件にする魔女だけ。
魔女は悲しい結末を知っていた。
だって
大好きな家族も海の宮殿も
美しい声も奪ったのだから。

人魚姫は
王子様との結婚も望んでいたけど
もう一つ、永遠の魂にも憧れた。
もしかしたら

恋を知らない15歳は
永遠の魂のほうを強く望んでいたのかもしれない。

アンデルセンは
いったい何を伝えたかったのか。
困ってしまいもうこれ以上感想文が書けない。

300年生きる人魚

そんなに長い大切な命を引き換えにする恋って
どんな感じなんだろう。
現代の感覚から離れすぎて、イメージが遠すぎる。
わたしも人魚姫になったら同じことをするかな。。

アンデルセンさん
どうしてこんな救いのない恋物語を書いたのですか？

本人に会って聞いてみたい

(おわり)

毒りんごさんに書き直しの差し替え版送ってもらったので、再掲載します。

- 一 人魚が住む海の世界
- 二 王子が住む人間の世界
- 三 永遠の魂が存在する空気の世界

それぞれの世界で
「愛」の意味が違う。
その3種類の愛を巡る物語

海の世界では
家族からの無償の慈愛。
王子様へは
恋愛からはじまった捧げる愛情。
空気の世界は
善を重ねて得られる永遠の魂と神からの愛。

答えの違う愛をそれぞれに経験し
苦しみながら成長する（昇華かもしれない）。
ただその度に失うものがある

自己犠牲がなくては
天の世界へはゆけないという
キリストの教えでしょうか

運命的に出会った王子様の心の中に
最後まで入ってゆけなかった人魚姫の心情は
諦めと同時に悲しくもろい涙を落とした

その涙は
永遠の魂へ向かう道程の墓標のように感じる

短い文章の物語なのに
読み進めてゆくうち、
300年の命よりも、
片想いの恋愛よりも、
大事なものは何かと問われ
成就しない恋への虚しい共感が残る

人魚姫がはじめて
海の上へ上がり
王子を救った日
2人は同じ15歳の誕生日だった

運命的に出会ったのに結ばれなかった恋
叶ってほしかったな。

泣き虫のわたしは
お話の後半になるにつれ
目の中に水があふれて
濡れそうです

（おわり）

『人魚姫』感想文

『おお、あなたです！』王子は叫びました。

王子のこの言葉に人魚姫を読んでいて、やっぱりそんなうまい話はないよなって思いましたが、現実でも結構、残酷なこと多いので納得しました。

あくまでも、人魚姫の片思いでしかない話ですし、海で王子を助けたけれども、陸に上がってから助けた相手と間違えられてしまったら結構なハンデだと思いました。

再び王子に会いに来るまで、両親や、お姉さま達、お婆さまと一生会えない覚悟で会い来ているし、さらには魔女から舌も切られ美しい声を失ってしまったら、人魚姫の武器は美貌と激しい苦痛を味わう華麗なステップのみで王子の気をひかなくてはならないので、人魚と人間ではハードルが高い恋愛物語だと思いました。

ただ、人魚姫はこのまま何も冒険もせずに、海の下に沈んだ王子に似ている美しい大理石像をを抱きしめるだけでは悲しい物語になってしまう。

お姉さま達もこのままでは妹が死んでしまうと、必死に人魚姫を助けようとするが助けるためには、魔女からもらった短刀でその王子を殺せと言われる。

もし、王子を殺していても悲しいし、王子を殺すぐらいならと自分があわになる覚悟を決めたのもやはり悲しい。

どちらの選択も悲しいことしかないのでありますが、救済措置として『空気の精』という、お婆さまも知らない存在になれたのが良かったと思いました。

そして、人魚姫は自分自身はボロボロなのに、花嫁の額にキスが出来るほど器の大きいお姫様だったのだと尊敬してしまいました。

もし器が小さかったら、王子と花嫁は人魚姫に殺されていたのではないかと。

たぶん、この人を恨まない人魚姫は空気の精となっても、王子と花嫁が天候などで困った時には、住みやすい気候に調整してくれるだろうし、そして、これから産まれるであろう王子の子どもが例えお行儀悪いことをしても温かく見守ってくれる気がしました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『人魚姫 感想文』

小学生の頃、学校の宿題で感想文を書かなくてはいけなくて軽い気持ちで書いたら、校内放送で発表することになって、担任の先生に添削されながら嫌々書き直した事を思い出します。

ツイキャス読書会で感想文を書くことになってまず人魚姫の事を思い出しました。どんな内容だったかは詳しく覚えていませんが、なぜか好きな物語でした。当時は人魚姫は自分の命を犠牲にしても王子を助けたいという事に感動した…みたいな事を書いたような気がします。小学生の頃は思った事をすぐに文に出来たのに素直な気持ちを失ってしまったからか何を書いていいのか分からなくなりました。

人魚姫が欲しいものは王子さまで、王子が居ないなら生きていても仕方ないぐらいに思っていました、本当に欲しいものは不滅の魂なのかなと分からなくなりました。

人魚姫は、命懸けで王子に会いに来たのに本当の気持ちを伝えられず可哀相だと思いました。もし、字が書けたら、手話が出来たら(あればの話ですが)せめて気持ちを伝えられたのかもしれないと思いました。

魔女に薬を貰う前にお勉強出来れば王子を助けたのは私です！と伝えられたのかも…なんて考えていました。

今回読んでみて、一番印象に残ったのは、泡になった後人魚姫は王子の花嫁のひたいにキスをしてあげていた所は人魚姫の優しさが伝わってきました。私だったらデコピンぐらいはしたかもしれない。

本当は王子がもっと敏感な人物なら人魚姫に気付いて人魚姫と結婚して幸せに暮らしましたとき。であって欲しいと思いますが、平凡な海の底の生活を捨てて、泡になるかもしれないのに恋しい王子に会いに行き、ひとときの幸せを得て不滅の魂を手に入れられるかもしれないという希望を持つことができた人魚姫はそんなに不幸ではないのかもしれないと思いました。

今回、改めて読んでみても『人魚姫』は私の好きなお話だなと思えたので良かったです。

(おわり)

『 人魚のひいさま 』 感想 ～傷心と空虚～

私は幼き頃、絵本で子供向けの「にんぎょひめ」を読んだ。そして、ひいさまに反感を持った。「なぜ、泡になるかもしれないのに王子に会いにいったの？」と子供ながらに不思議だった。声を失ってまで、陸に上がった思いが理解できなかったのだ。

当時、私はまだ自分のことしか考えられない子供だった。

森瑤子氏の小説やエッセイで、度々登場するフレーズがある。

「傷心と空虚のどちらかを選ばなくてはならないとしたらどちらを選ぶ？」と、男は女に尋ねる。女は「空虚はなにもないこと。そんなのぞっとしない？どんなにつらくても傷心を選ぶ」と答える。男は空虚と答える。「耐えきれないほどの傷心に比べたら、なにもないほうがましだ。」

私は当時十代で、当然ながら「傷心」を選んだ。傷ついても怪我をしても、何もないことより絶対にいいと思っていた。たぶん、ひいさまもそうだったのだろう。魔女にどんなに過酷な条件を突きつけられても、王子に会うことしか選択肢がなく、刹那的な恋に抗えない。故郷を失い、声を失ってもまだ一途なひいさまは、恋を叶えるために自分のことしかみえてなかったのだろう。ただ、ひいさまの姉が王子を殺すために届けた短剣を捨てたときに彼女は変わったのだ。自らの運命を理解しながら、敢えて王子を殺さず、王子の結婚を祝福する。自分より相手の幸せを考えてこそ、はじめて「愛する」ことができたのだ。

自分が助けたことを知らない王子を齒痒く思っていたひいさまではなくなったのだ。

三百年のおつとめも、「愛する」ことができるひいさまなら乗り越えられるだろう。

私は幼き頃、恋に抗えない思いなど知らなかった。自分より相手の幸せを祈るなんて考えられなかった。たぶん、「にんぎょひめ」は大人になって読むべきなのかもしれない。

今の私なら、「傷心と空虚」のどちらを選ぶだろう。森瑤子氏の答えは、「傷心は妥協の産物。私はすべてでなければ何もいないから、空虚を選ぶ。」だったらしい。今なら私も空虚を選ぶかもしれない。大人って欲張りでズルいのだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「さかなフレンズ あなたは、さかながお好きですか!？」

人魚姫（以下さかな女）のばっばは、語る。さかなフレンズは、死んだら、海の泡になってしまう。フレンズには、魂がないから 300 年の寿命で、全て終わりなのよ、と。

愛し合うものたちだけに、不滅の魂があったら、さかなフレンズには、地獄である。何が楽しくて、後朝のベッドのかたわらで、王子の口から飛び出した、寝言の残酷さに身悶えながら泡にならなきゃいけない NO! 空が墮ちればいい NO! とこの元 SKF の元センター（姉たちは、現役 SKF48 メンバー＝さかなフレンズ）が、「王子刺す NO!」と思うのは当然だ。

キリスト教圏では、永遠（＝不滅）というコンセプトと、愛というコンセプトには、密接な関係がある。

神なる主を愛すること、隣人を自分のように愛すること（マルコ福音書 12 章）

最大の掟とは、「愛」の XYZ 軸の発見なのだ。説明しよう。キリスト教では、神を愛すること（X 軸）、自分を愛すること（Y 軸）、他人を愛すること（Z 軸）、この三つが同時に成り立たないと、「愛」は成立しないのだ。

人魚の世界には神がないので、神を愛することが出来ない。その上、さかな女は、王子に恋はしているが、自分のことは、全然好きじゃない、さかなとしての劣等感があるので、小顔でかわいい、（しかし、純粋なわりに、お水っぽい）のだろうが、気の毒なほど自己重要感が低い。

XYZ 軸が欠けているのに、王子様に「愛される」のは、どだい無理な話だ。

まず、さかな女が、人間界で「愛」を学んで、こつこつ実践する必要がある。

なぜ、人魚姫は空気の精になったのかということ、空気みたいに存在感のない状態（さかな臭い劣等感と決別したニュートラルな状態）で信仰（神への愛）と他人のご家庭のガキを受け入れる寛容さ（他人への愛）を学ぶ期間なのだ。X 軸と Z 軸だけ学ぶ講座だ。（カトリックで云うところの煉獄だ）

とりあえず、この講座を 300 年受ければ、少しは「愛」がなんだかわかるだろう。

イグアナの娘だとて、さかなフレンズだとて同じこと、わたらの地球全体だとて。

ギョギョギョ!

（おわり）

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>